

## ■■■ 狩祭り ■■■

### しし祭り

富山村大谷の熊野三社権現は、二の宮を諏訪明神と称し、同じ境内に祀ってあるが、明治一二、三年まで、一に「しし祭り」また「ぶしゃ祭り」という行事があった。「しし祭り」は別に御神楽の条にも一、二の土地の例を挙げておいたが、ここに行われていたものは一段と形式が古かったようである。

行事は毎年三月一日に行われていたのであるが、その前すなわち二月中に、別に地内のものが集まって、狩を催す。そのおり獲物がない時はその年の祭りは中止になったのである。そして猪、鹿または狐狸の類でも獲物があれば、初めて祭りが行われる。後にはそれを売って若干の代償を得、それを祭りの費用に充てる定めになっていた。そして当日になると、地内のものが氏神の境内に集まり、杉の葉で雌雄二頭の鹿を作り、腹の部分に白餅

(おはたき<sup>しとき</sup>という粢) を納れた苞を入れ、出来上がるとそれを境内の隅に飾っておいて、これを禰宜が竹の弓矢で射ることは、すべて御神楽の条に言った次第と同じであるが、その前に別に一つの行事がある。

すなわち村民各自、竹槍、弓矢を用意して、その日も山狩りをするのである。主役は別当で、一同に向かって、これより山狩りに着手する旨を伝達し、第一に狩人の名、次に勢子一同から犬の名前まで呼び上げ、着到を記し、それより狩場の峰谷を言い、そこに向かって出発するのであるが、事実これは仮想であって、一同は神社裏の山に繰り込み、用意の弁当、酒などを開いて、遊び半分に狩の真似事をなし、時刻を測って切り上げ、境内に還り、山々谷々を隈なく索めたが、さらに獲物のなかった旨を報告する。そこで別当が、さらばいずれの地を狩り立てよと二回目の出発を命ずる。この時の口上はまた別で、どこそこの峰または谷に、たしかに鹿の足跡のあった旨を披露するのである。

これにも一同遊び半分で帰って来る。さて二回目を帰って来る時刻を測って、別当が鹿を射る。矢は別当三人が三々九度に射て、最後の矢で射たと叫ぶのである。この声を合図に一同が、やあ射た射たと悦び勇んで、我がちに鹿に向かって飛びかかり、腹にあらかじめ納めてある苞を破り、中の白餅を頬張り食うのである。これで行事は終わって、後は社殿脇に臼を据え、草餅を搗いて神前に供え、一方参詣の女子供に分けたのである。

### とうとう天神の祭り

富山村大谷における「しし祭り」と共通する行事を、豊根村古真立字曾川では、陰暦二月の初め、村の「とうとう天神」の森で行ったと言う。これも明治初年を境に廃絶したた

め、次第を詳細に知ることはできぬが、これには別に五穀成就を祈る意義があったようである。狩の口上は充分これを記憶するものがないのは遺憾であるが、中に、

信州矢立峠より遠州額の堂迄狩立つれど更に猪鹿の影はなし

とて第一回の口上は終わったと言う。さらに第二回目の口上には、

日本ヶ塚矢筈小矢筈を廻れば雌鹿雄鹿一對の足跡を見出したり

しからばそれを狩立てよ云々

とあった。なお同所では、鹿を麦稈で作り、勢子は全部素足のままで勤めるので、年により、雪があつたり、あるいは森に栗の木が多いのでイガがあつて、ずいぶん難儀な祭りだったと、参加した一人の老人は語っている。なお当日行事の終わった後、各自桑の木の枝をもって鍬の形を作り、これを家に持ち帰ってえべす棚に祀ったという。これに対し別に秋祭りと言うものがあり、陰暦九月中だったと言うが、春の祭りに対するお礼祭りとして、社前に小形の「はざ」を作り、これに穂物と言って、粟黍等の穂を掛け祭ったという。

### 初午の種取り

振草村古戸においては、前言った行事と等しいものを一に初午の種取りと言い、陰暦二月初午の日に行っていた。当日朝、村の稻荷社の前に別当職のもの三人集まり、青杉の葉をもって雌雄二頭の鹿を作る。角は青木の枝（これをおおきば、または、みそばと言う）にて作り、耳はそぎ竹で、脚は同じく竹であった。出来上がると社殿の脇に据え、別当三人が弓を持ってこれを三々九度に射る。弓はこれを「はまや」と言った。そして一方、鹿の腹部に青杉にて苞を作り、中に小豆飯の団子を入れ、これを「ごく」と言い、そうして別に白米を添えた。この苞を一般に鹿のさご（胎児）と言ったのである。

別当が最後の矢を射ると、あらかじめ一人が待っていてこれを倒し、抱き上げ、すぐ腹を割って中の苞を取り出す。そのおり一般の村民は、各自白紙と花の木（香の木とも言う密）で作った鍬を持って出で、苞に入れてあつた白米に、別に境内の土を混ぜて五つの包みに分け、これを五穀の種として鍬に結びつけ、それに鹿に用いた杉の葉を添え家に持ち帰り、えべす棚に祀っておく。この場合の鍬は、男子一人につき一個と決まっているので、かりに家内に五人の男子があれば五個を作って、それに種苞と杉葉を結びつけるのである。なお苞の中に入れた白米だけでは、村内一般に分配するには不足するので、別に用意せるものと混ぜたのである。

この時、一方苞に入れた「ごく」の小豆飯の団子は、これを参詣の女子供にくれるが、これまた苞に入れただけでは不足するので、別に用意するものと混じ、握り飯にして与えたのである。これにはいっさい塩気がないので、決してうまいものではないが、以前は子

供はもちろん年頃の娘たちまで争って貰い受け、その場で食べたのである。それで譬え話にも、混雑することを初午の団子を貰うようだと言うくらいであった。

なお別当が鹿を射る前に、以前は別に「まみ」と称して、白紙に輪を描いた的に糸をつけて、これを一人が引っ張って逃げ、後を多勢で追い回し、叩き破ることがあったが、いまは絶えている。

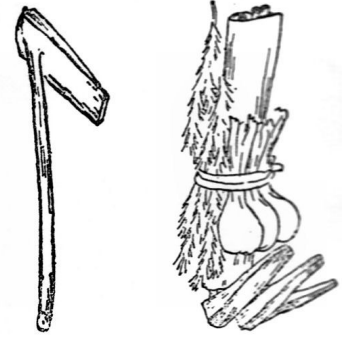
## 鍬柄祭り

古戸の初午の種取りに当たる行事を、隣村である小林では、鍬柄祭りと言っている。陰暦一月十六日朝、地内の「みょうど」六人のものが、氏神の社殿に集まり、桑の枝をもって小さな鍬の形を作る。これを「おおくわがら」すなわち御鍬柄と言う。これに五穀の種と称して、境内の土と白米を混ぜて白紙に包み結びつけて、社殿正面の注連に引っ掛けて祭る。かくして一方同じような形の鍬を今一個作り、これに残りの白米と土を混ぜた紙包みを結び、これは各自家に持ち帰って、年神棚の注連に掛け祀り、二月一日年神送りに、注連とともに、屋敷内の清浄な場所へ収めたのである。また中には五穀の種を粃種その他の種に混ぜるものもあった。

そして同所においては、「しし祭り」すなわち鹿を射る行事は、これを「しゃち祭り」と言って、陰暦一月五日に氏神の境内で行った。同所の鹿は他と

はいくぶん趣が変わっていて、前年花祭りに使用した花の御串の竹を集め、これにて簡単な鹿の形を作り、腹部に別に「さご」と言って白餅の団子を入れた苞を下げたのである。なお別当が鹿を射て後、苞の中の団子すなわち「ごく」は、地内の狩人を渡世に

するものが申し受けて持ち帰ったのである。ちなみに同所の氏神は、一に宝明神とも言い、諏訪神社を祀ったものであった。

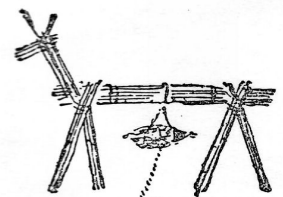


第59図 五穀の種(古戸)  
第60図 おおくわがら(小林)

くわがら



第61図 「くわがら」と五穀の種



第62図 「ししか」とさご

たから